

木造の 21世紀を 考える 27



1

建築家
宮晶子

壁の建築、柱の建築

宮晶子さんは、デビュー作の「那須の山荘」以来、一貫して壁の建築を数多く発表している建築家である。彼女はなぜ壁にこだわるのか、彼女は柱の建築についてはどのように考えているのか、壁と柱の組み合わせ方の新しい可能性はいかにあるのか、などについてお話をうかがった。

聞き手・文・橋本純

①「那須の山荘」内部を見る。壁柱の幅は600mm、柱間は2,100mm。／写真：Shinkenchiku-sha
②「那須の山荘」全景。建物の幅は3,300mm。／写真：miya akiko architecture atelier

冒険好き? だった少女時代

宮さんはどちらの生まれですか。

1963年、兵庫県生まれです。父は日本電信電話公社(現・NTT)に勤務する建築の構造エンジニアでした。東京工業大学の出身で、篠原一男さんや林昌二さんと同級生だったそうです。当時は各地に電話局を次々に建設していた時代で、父は、兵庫、東京、熊本、兵庫、東京とほぼ2年おきに転勤を繰り返し、私たち家族はそれと共に転居していました。私が小学校5年のときに、今の実家である横浜市戸塚区に家を建ててようやく落ち着きました。母は小学館に勤めたあと子育てに専念していて、3歳上には兄がおり4人暮らしでした。

どのような幼少期でしたか。

母の実家が岡山県の笠岡の山間集落にあって、小さな蓮池の前にはぼつんと1軒たたずんでいるようなとても美しい場所でした。そこに毎年夏休みの間、兄と一緒に1ヶ月くらい預けられて過ごしました。到着すると、むせぶような草の匂いが体を包み込み、裏山の笹で釣り竿をつくって釣りをし、夕立が来たら橋の下で雨宿りして、やまないから走って帰ると五右衛門風呂が沸いていて、という絵に描いたような田舎の夏休みで、それが私の原風景になっています。普段は、女子の友だちとままごとなどもやっていましたが、どちらかというと兄とその友人たちにくっついていって、冒険したりいたずらしたりするほうが好きな、そんな子どもでした。

美大進学をやめ、建築の道へ

どのような中学生時代でしたか。

中学は地元の横浜市立境木中学校で、絵や工作が好きだったので、美術部に入りました。同時に憧れていた女子の先輩がいる合唱部にも入り、部活動は非体育会系な日々でした。高校は神奈川県立光陵高校です。家から徒歩20分くらいで、電車通学ではなかったため、どこか牧歌的な日常を送っていました。中学時代が文化系部活だったからか、子どものころ一緒に遊んでもらっていた兄の友人から、高校時代は体育会系の部活に入っていたほうが絶対がいいと、なぜか切々と説得され(笑)、先ほどの合唱部の先輩が同じ高校のテニス部に入っていたので、そうだ私もテニス部だと(笑)。建築設計の世界は体育会系なところがあって、自分の体力の限界をそこで試せたことやチームでの活動など、やはりあのときやっていたよかったと、今になって思うことがあります。

建築学科を目指そうと思ったきっかけをお教え下さい。

気持ちは美術部だったのに美術部には入らず運動部生活をしたので、2年生の終わりにから慌てて美大に行くための画塾に通い始めました。

しかし、美大に行ったあとどのような職につくのが気になっていて、いろいろ調べたりしているときに、父から建築もあるとよとわれ、それがヒントになりました。日本女子大学出身の母からは、住居学科の卒業生に林雅子さんという著名な建築家がいると教わり、高校の先輩からは男女で相対化されずに過ごせる女子大のよさについての助言も得て、それならと日本女子大の住居学科への進学を決めました。

ペルーシアで建築に覚醒する

どのような学生時代でしたか。

実は、入って早々、間違えた! って思ったんです(笑)。当時の私は、ものづくりにばかり意識が向いていて、製図の基礎や住居学のような計画系の講義に物足りなさを感じ、美大を受験し直したいという気持ちになっていました。

そのことを母に相談していたのですが、母が岡山時代の女学校の同級生に画家の夫仲間と行くイタリアとフランスへのスケッチ旅行に誘われたとき、あなたがそんなに鬱々としているのなら、私はいいからあなたが行ってきなさい、と背中を押してくれたんです。大学2年になる前の春休みでした。

建築を見る旅ではありませんが、スケッチ旅行ですから都市をゆっくりと見て歩くことができました。ローマに入り、フィレンツェを経てアッシジ経由でベネチアに行く途中で、少しだけペルーシアに立ち寄ったんです。ペルーシアは、階段やスロープ、アーチなどで街路が形成された中世山岳都市で、ほんの数時間でしたが、ひとりで街を歩き回る時間がありました。そのとき、自分が歩くたびに目の前の風景がどんと変わっていく体験をして、「私の体は今ここにある!」とひとり心の中で叫んでいました(笑)。身体がここにあるのはむろんあたりまえなのですが、自分がここに確かに存在するという感覚は初めてのものでした。こうした感覚を人間に与えることは、絵画でも彫刻でも映像でもなく、建築にしかできないことだと思えて、美大再受験への思いはきっぱりと消えました。偶然が重なって得た機会でしたが、私がやりたいことはこれだと思える必然になって、2年生以降は課題に没頭する日々となりました。

卒業論文あるいは設計についてお聞かせ下さい。

ペルーシアの経験以降、私は自分が住んでいる横浜のいわゆる新興住宅地がなぜこんなにつまらないのだろうと、とても疑問を抱くようになりました。それならどのように住宅地を計画したら豊かな空間になるのか、それを構造的な問題として捉えることに興味を持って卒業論文を書きました。

機能に束縛されるなという教え

大学院には進学せずレーモンド設計事務所に入所しますね。

早くものづくりの世界に入りたいと思っていたので、大学院には進学せず設計事務所に行くことを決めました。

小川信子先生がレーモンド設計事務所を推薦して下さい、アント



2



3

ニン・レーモンドのことはとても好きだったので、入れていただきました。アトリエ事務所だと思っていたのですが、すでに総勢100名近い組織事務所になっていて、事務所の方針も自分が思い描いていたものとは少し違い、悩みました。でもすぐに辞めるのはよくないと思い、結局5年在籍して、ひとつ現場を最後まで担当させてもらい、退職しました。

その後、アルテック建築研究所に転職しますね。

アルテックの仕事を学生のころから『都市住宅』誌で見えていたが、写真には住んでいる人の生活が写っていて、それでいて空間は空間として厳然とあるんです。生活を制圧しているわけではなく、しかしおもねっているわけでもなく、それぞれが関係し合いながらもどちらも対等に豊かにあるという建築のあり方に憧れていました。そういう建築を改めて学びたいと思って門戸を叩きました。アルテックは阿部勤さんと室伏次郎さんが始められた事務所ですが、当時は仕事とスタッフがはっきりと分かれていて、私は室伏さんのチームに入りました。

室伏さんから学んだこと、影響を受けたことについてお聞かせ下さい。

室伏さんは、「機能で建築をつくったならば、そのときにいいと思った機能に、住み手はずっと束縛されてしまう」とよくおっしゃっていました。なので、洞穴のような場所が先にあって、そこに住み着いていくような設計プロセスを大切にするのだと言われました。まさにそれが知りたかったアルテックの建築の秘密なのだと思います。クライアントが言うとおりにくっついてはクライアントのためにならないんだよ、ということなんです。そのときのベストは年数が経ったのちのベストとは限りません。なのでそれを超えた、空間というものをつくっておくこと、時を経て用途が変わっても別な使い方を誘発する豊かな場をいかにつくっておくかという思想にとっても共感しました。

ふたつのA

1997年に事務所を設立されますが、独立のきっかけをお聞かせ下さい。

アルテックでの仕事は楽しく、やめるつもりはなかったのですが、両親が所有している那須の土地に兄家族と使える小屋を建てようという話が浮上してきました。お休みをいただいて設計をしようと思ったのですが、室伏さんから、半分は自分の仕事、半分は事務所の

仕事という働き方でもよいといっていました。ただ、その直後に担当することとなった「牛久保の家」が猛烈に忙しい仕事で、とても自分の仕事どころではなく、次に新しい仕事 cameたらまた同じことになるだろうと感じ、独立して専念することにしました。そして完成したのが「那須の山荘」です。

独立したときの「STUDIO 2A」という事務所名の由来をお聞かせ下さい。

六本木ヒルズの再開発が始まる前の敷地にあった破格に安い部屋を住まいに借りていたのですが、まず事務所が必要だと思い、友人を誘ってシェア事務所に衣替えしました。そこが2A号室で、部屋のサ

インの上に急速「STUDIO」と貼って「STUDIO 2A」となりました(笑)。「那須の山荘」を『新建築住宅特集』誌に発表する際に変えるという選択肢もありましたが、2Aは自分のスタートの場所であることに加え、私は時間を経て残ったアノニマスなデザインへの憧憬があったので、アーキテクトとアノニマスというふたつの相反するAに意味を込めてこの呼称を続けることにしました。ArchitectのAは晶子のAでもあります。今は、スタッフとも協働することとなり、自分の名前を事務所名につけて、architecture と atelier にこのふたつのAの意味を重ねています。

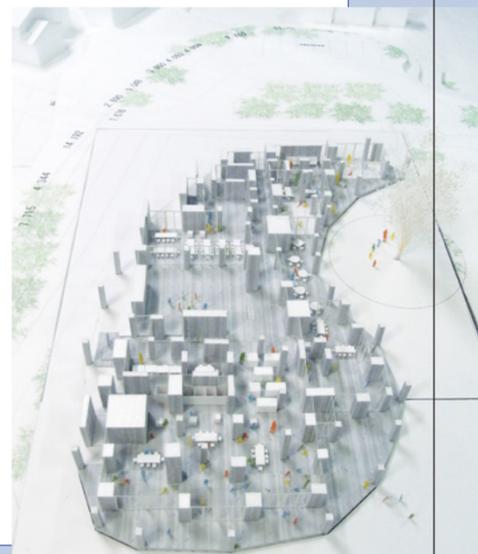
どのように建築をつくってこうと考えていましたか。

いつも、身体とランドスケープをつなげるメディアとしての建築、を意識しています。設計を始めるときは、1/2,500の地図などでその場所についてまず広域に把握し、実際の敷地を具体的に観察し、その両方の視点から、どのような建築が好ましいかを考えるようにしています。

壁の建築

宮さんの建物を拝見すると、最初期の「那須の山荘」から、壁を立てる、という設計手法が一貫しています。宮さんは、なぜ壁の建築を目指したのでしょうか。

「那須の山荘」は、最初から壁ありきではなく、敷地の高低差やスケールのことからスタディを始めています。あえて建物幅を3,300mmと狭いものにしたので、室内に壁柱を入れれば邪魔なはずですが、でも、トンネル状のワンルームだったらすべてが見通せてしまい、人の居場所ができない。構造を検討する中でふとできた壁を内部に配する案は邪魔なのではなく人



4

のよりどころなのだと思いついたとき、奥行や歩くたびに見える世界が変わっていく状態をつくるのがイメージでき、これで建築になると思えた瞬間でした。このとき、身体との関係のつくり出すよりどころの壁というこれまでの壁とは異なる新しく私らしい建築概念のスタートも切れたと思っています。

これはペルージャの路地が建築化したものだと理解してよいですか。

そうですね。小さな建築ですが、歩くたびに増えてくる世界が変わっていくこと、身体を感じながら風景全体を体験しているという感覚は、私がペルージャで感じたこととつながっています。

柱と壁の間

宮さんの建築には木造が多いですが、木造にはどのような特徴があるとお考えですか。

まず、触っても冷たくないという点が木の特徴です。「那須の山荘」では、家具的な身体スケールであることからその観点と、雑木林の中で同質なものがいいということから木造を選んでいます。周辺環境と身体との関係で構造を選ぶことが多いです。そして木造は圧縮と引っ張りの両方に強い。コンクリートと鉄は性能が極端ですから、素材の力が見える表現としても木造に共感しています。

SE構法はご存じですか。どのような印象を持っていますか。

播繁さんが構造に関わっておられたので最初期から注目していました。私の設計はこれまで壁が適しているケースが多かったのですが、SE構法にはまだチャレンジしていませんが、柱が1本立つところに建築の原点があるとも思っていて、柱が単独で立って見える必要を感じたとき、木造軸組構法でそれを表現したいと思います。

軸組構法でも一般的には耐力壁を必要としますが、軸組と壁を意匠的に融合させた木造空間の可能性についてはどのようにお考えでしょうか。

建築には、人を見え隠れさせる壁の動きと、周囲に場を発生させる柱の動きの、両方が混在しているのがよいと考えています。以前に計画した「S.S.保育園」では、子どもがかくれんぼをしたりするときには見え隠れできる壁があったほうが豊かな場所になりますが、見守りをする保育士の観点からは隠れ過ぎになる場合があるので、300mm角から1,800mm角まで、いろいろなサイズの箱状の柱を考案し、大きな柱は収納に、小さな柱はダクトを通したりして機能を与えながら柱が林立するような空間を提案しました。今後は、そうした箱状の柱に105mm角や120mm角といった通常の柱も加え、さまざまなサイズの柱を混在させた空間をつくってみたいと思っています。一般的な柱の幅は人間の目の幅と同じくらいなので、ちょっとした動きで見え隠れが生まれます。目の幅が空間認知に与える影響は大きくて、壁を設計する際もいつも小口のサイズには気をつけています。



5

建築の未来について

21世紀に入って20年近く経ち、世界においても日本においても、社会構造に変化が見られます。そうした変化は建築にどのように影響しているとお考えですか。

建築はとても変化が遅いメディアなので、逆にそういうところが人間を救済する可能性を持っているのではないのでしょうか。100年や200年経っても、人間の身長が倍になるわけではなく、身体プロポーションがそれほど劇的に変わるわけではありません。また、若干の地域差はあるにしても、それほど身体の特性は大きく違いはしない。現代になって電子メディアなどが急速に進化して時空間スケールに対する認識が変わったところはありませんが、自分の身体自体はほぼ変わっていない。建築はその身体とつきあっているメディアです。それを信じてやり続けることに意味があるように思います。

宮さんは、建築の未来についてどのようにお考えでしょうか。

建築が身体との関係の中で成り立つということは、建築が過去や未来といった単純な時間の上で語りきれない、より持続的なメディアだということです。そのように捉えています。そこが建築を続けられる理由だと思っています。

③「house I」内部を見る。／写真：miya akiko architecture atelier
④「S.S.保育園」計画案。／写真：miya akiko architecture atelier
⑤「house K」内部を見る。／写真：Shinkenichiku-sha



宮晶子 (みや・あきこ)

1963年兵庫県生まれ。1986年日本女子大学家政学部住居学科卒業。1986-1991年レーモンド建築事務所。1991-1996年アルテック建築研究所。1997年STUDIO 2A設立。2012年～日本女子大学家政学部住居学科准教授。2018年事務所名をmiya akiko architecture atelierに改名、現在に至る。写真：miya akiko architecture atelier